

こうくない ぶんかざい おおみや いせき しょうかい 校区内にある文化財 ~大宮遺跡の紹介

はじめに

みなさんは、湯田小学校から1kmほど東にある「大宮公園」の下に、大宮遺跡という、大昔の人の生活のあとがあることを知っていますか？

これまで何度か発掘調査もおこなわれ、全国の考古学者のあいだでもけっこう有名なこの遺跡、いったいどんなくらしがくりひろげられていたのでしょうか。発掘当時の写真や出土品といっしょに紹介します。

どこにある?! 大宮遺跡

大宮遺跡は、湯田小学校から1kmほど東にある遺跡（昔の人の生活のあと）です。

神辺町の御領のあたりから駅家町・府中市中心部のあたりまでは、芦田川・高屋川やその支流の川が山から運んできた土砂がたまってつくられた平野（神辺平野）が広がっています。この神辺平野やまわりの山の上には、古くからさまざまな人々のくらしが繰り広げられてきました。

大宮遺跡のはじまり…縄文時代の生活

大宮遺跡で人のくらしがはじまったのは、縄文時代の後期（約4000年前）です。

土器が見つっていますが量は少なく、くらしていた人数はまだ少なかったようです。



大宮遺跡と神辺平野の主な遺跡

米作りが広まったころの大宮遺跡

昭和53～60(1978～1980)年度に、現在の大宮公園やその周囲で発掘調査が行われ、4本の、弥生時代の濠のあとが見つかりました。

いちばん西側の濠(図①)は弥生時代前期(約2300年前)につくられたもので、幅約1.8～3m、深さ0.9～1.3mあり、さらに内側に土を盛り上げてつくった土手(土塁)状のものがつくられていました。他のむらとの争いから自分のむらを守るために周りを囲んだものの一部と考えられています。

東側の3本(図②③④)は、①に土砂で埋まった頃の、弥生時代中期(約2100年前)に掘りかえられたものです。土塁状のものはつくられず、濠に水が流れていた形跡があったことから、水を調整して土地を管理するためにつくられたものと考えられています。

弥生時代は日本で米作りが広まった時代です。大宮遺跡も、いねの栽培に向いている水の便の良い湿地にあることや、いねの穂をつみとるときに使う石包丁が出土していることから、周囲に水田をつくって米作りをしていたと思われます。

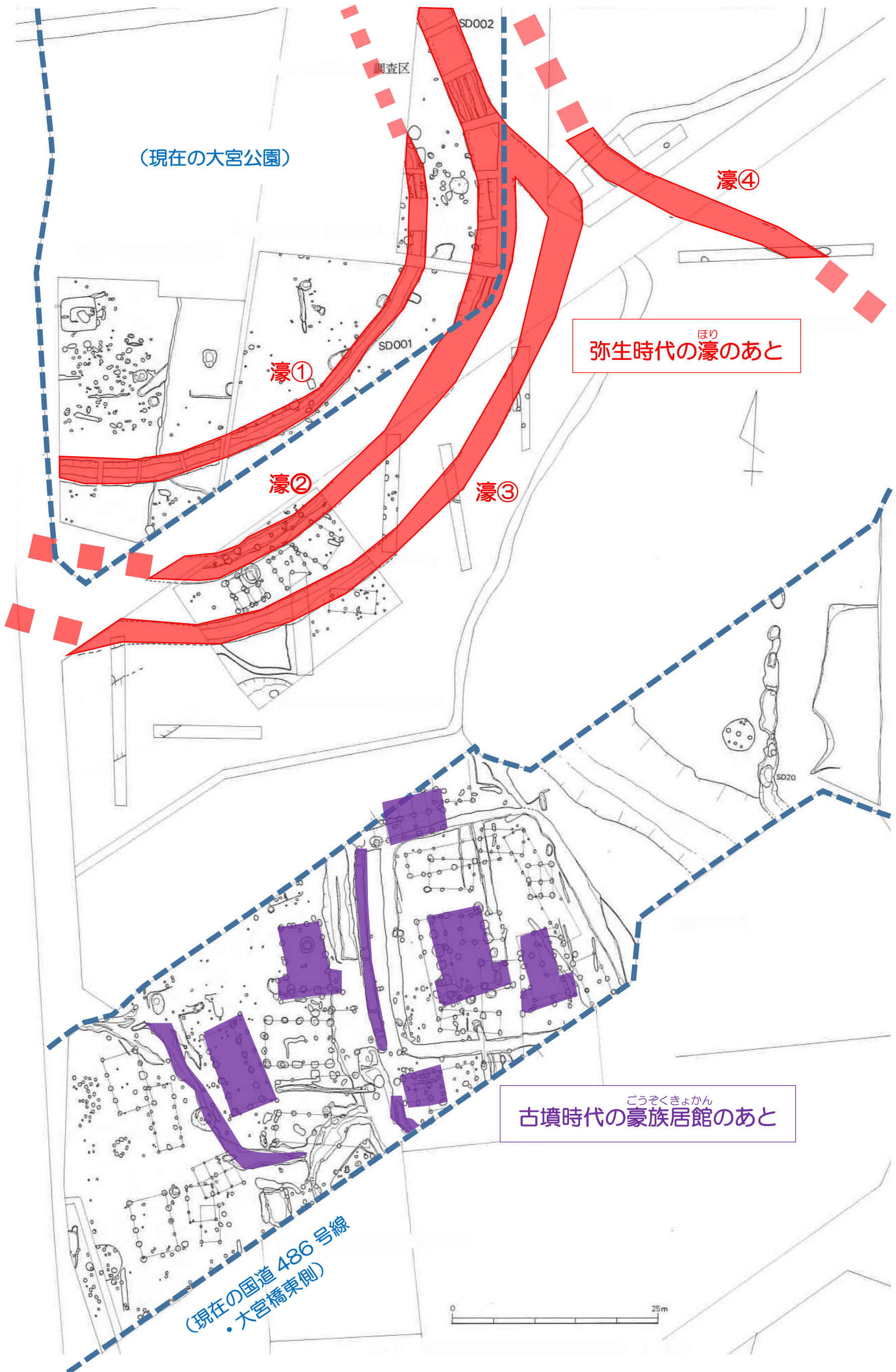
米作りには多くの人手が必要ですが、野生の動物や木の実などの食べ物を求めて生活していた縄文時代と違って食料を安定して得られます。

大宮遺跡では弥生土器をはじめ、たくさんの出土品が見つかり、多くの人手を集めた共同作業を必要とする濠の掘りかえも、何度もおこなわれていることから、米作りによって人口を増やすことができたと考えられます。



発掘調査当時の濠(左)と、発掘地点の現在(右、大宮公園。黄色の枠が右写真の範囲です。

赤色で示した位置に、弥生時代の濠がありました)



大宮遺跡の主な発掘調査地点

古墳がつくられていたころの大宮遺跡

昭和 59・60（1984・85）年度、国道486号線の整備工事にともなって発掘調査がおこなわれ、現在の大宮橋東側で、古墳時代後期（6世紀後半から7世紀初め）の大きな建物のあとが見つかりました。

建物のあとは6棟みつかり、向きをそろえて建ちならんでいました。そのうち3棟は、建物の広さもおよそ10m×5mと、ふつうの竪穴住居の2倍以上あり、南側に大きなひさしをそなえていたことから、特別な建物と考えられています。建物の脇には、敷地を区画するためのものと思われる溝もみつかりました。

弥生時代に広まった米作りは、生活の安定をもたらしましたが、たくわえの量のちがいによる、むらの間の貧富の差もはだいに大きくなりました。集落の中にも指導者があらわれ、政治的・経済的な力をたくわえた豪族に発展し、力をしめすものとして大きな墓（古墳）をつくるようになったのが古墳時代です。

古墳時代には、各地で、一般の人々の集落との間を濠で隔てた区画の中に、大型の建物が立ち並ぶ施設がみつかり、豪族のすまいを兼ねた地域支配の政治をおこなう施設（居館）と考えられています。大宮遺跡の溝をともなった大きな建物のあとも、古墳時代の豪族居館と考えられています。



発掘地点の現在（国道486号線大宮橋東側）

黄色の枠が古墳時代の大きな建物のみつかったところです。



発掘当時の写真

上の図の黄色い枠の範囲，むらさき色が大型建物跡の場所です。

(ほかの穴は，ことなる時代の建物のあとなどです。)



発掘調査時のようす（大型建物すぐ横の溝や穴の中から、たくさんの土器が出土した。）



【参考資料】豪族居館を模した？家形はにわ

（安芸高田市 史跡甲立古墳出土）

大宮遺跡の建物あとは、柱や壁・屋根などの部材がみつからないため、上屋の正確なかたちは分かりませんが、古墳から出土する家形はにわなどから推定することが可能です。

（安芸高田市 教育委員会発行）

『甲立古墳一発掘調査報告書』から引用）

奈良・平安時代の宮遺跡

宮遺跡では、奈良時代以降の建物あとはみつかりませんが、奈良時代から平安時代にかけてのものと思われる屋根瓦が出土しています。当時の瓦は1枚がたいへん重いもので、瓦を使った建物は、重い瓦をたくさん乗せても倒れない、がんじょうなものでした。

奈良時代・平安時代の日本は、中国を手本に、仏教の教えをもとにした、天皇を中心とした国づくりを進めました。天皇の命令により、平城京や平安京と全国各地を結ぶ道路がつくられ、道路沿いに国府など地方政治を行う役所や、国分寺・国分尼寺などのお寺もつくられました。地域の有力な豪族も、国にならってお寺を建てるようになりました。これらの役所やお寺には、中国にならった、瓦を使った大きな建物が建てられるのが特徴です。

宮遺跡のすぐそばには古代山陽道が通っており、15kmほど西に備後国府（現在の府中市元町のあたり）、1kmほど北東に備後国分寺がありました。宮遺跡にも、まだ発掘調査していないどこかに、奈良時代や平安時代に国や有力豪族がつくった大きな施設があったのかもしれませんが。

おわりに

この展示で紹介したとおり、宮遺跡では、

- わずかな人数の人々がくらしはじめた縄文時代
- 米作りをはじめ、むらを守ったり水の流れを管理するために共同で大きな濠を掘った弥生時代
- 生活の安定・たくわえをもとに現れた指導者（豪族）の居館がつけられた古墳時代
- 中国を手本とした国づくりのなかで、屋根に瓦をつけた建物がつけられた奈良・平安時代

という、時代ごとに移り変わる、くらしのあとが残されていました。国の歴史の大きな流れのなかにもありながらも、この地域の地形や気候にあわせて、わたしたちの祖先が、様々な工夫や努力を積み重ねてきたことを示すものです。

湯田小学校の校区内をはじめ、神辺町内やその周辺にはたくさんの特色ある文化財があり、それらの文化財は、神辺歴史民俗資料館、菅茶山記念館、ふくやま草戸千軒ミュージアム（広島県立歴史博物館）などの博物館や資料館でも紹介されています。

ぜひ、それらの文化財の現地や博物館・資料館を訪れて、先人の知恵と努力のあとのこされた、自分たちの住む地域の特色やすばらしさを発見してみてください。